北海道教育大学学術リポジトリ
Hokkaido University of Education Repository
国立大学法人 北海道教育大学
HOKKAIDO UNIVERSITY OF EDUCATION

貨幣数量説：特に1.FisherのQuantity Theory of Moneyについて

メタデータ	言語: Japanese
	出版者:
	公開日: 2012-11-07
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 藤波, 信成
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.32150/00000016

この計畫目標では國際收支の均衡はほぼ達成し得るが、生活水準では5—9年水準を一〇〇%實現していない。然し現在の國民所得が5—9年の七割弱であり、鑛工業生產は同年次の四割强、輸出貿易が一割程度に止り、また生產活動の上昇を阻止する諸條件が强力かつ多數である現狀から見れば この目標でさえかなり樂觀的に過ることを認めざるを得ない。卽ち調整によつて多少その目標を下げたとはいえ、昭和27年度の經濟水準は、實は昭和22年度の實績に對して、鑛工業生產に於て三割强、輸出は九倍强、輸入は三倍强、勞働生產性は二倍、實質國民所得は二倍の規模を實現せねばならないのである。そのためには具体的には日本經濟を圍繞する諸環境が次の如く樂觀的に推移することを、前提條件としている。卽ち (1) インフレは計畫年次の前期中（24年まで）にはほぼ解決される。(2) 東亞の政治的經濟的不安が、今後改善され外國通貨間の自由交換が可能となる。(3) 復興の過程に相當の外國援助を期待する。(4) 動力輸送部門の困難は前期中に解決される。

これらの前提は復興計畫達成のために、是非とも充足することを要請せられるのであるから、むしろ經濟復興實現のための政策目標を示すものであらう。

第一試案が發表された後、各方面から種々の批評がなされた。その中最も有力なものは目標計畫的色彩が强すぎて、實施計畫との關連がうすい。更に具体的には、物資面の計畫は相當詳細にたてられているが、これに對する資金面の裏付けがうすい。社會主義的計畫經濟ならば、物資需給計畫だけでも全体の經濟を動かすことが出來ようが、日本は資本主義の線に沿つて立直るのであるからたてられた物動計畫の線に國民を誘うための更に財政、金融、物價の面に於ける計畫がより精細になければ、計畫全体が机上プランになる。その意味からして、第一試案が前記中にインフレを收束するという前提を立てゝいるのも根據のない安易に過ぎない見透しではないかと言う点にある。

（未完）

貨　幣　數　量　說

特に I. Fisher の Quantity Theory of Money について

藤　波　信　成

Nobunari Fujinami : On Irving Fisher's Quantity Theory of Money

1

經濟界の景氣變動產業の興隆と沈滯經濟生活の安定不安定が問題とされる時、其等は殆ど何等かの程度に於て貨幣の購買力に關聯しその數量の變動に關聯を有している。若しも貨幣量の增加がその購買力に影響する事實を無視するならば貨幣政策の論據を失うのみならずその意義をも失うものである。それは貨幣政策の大半がその數量を如何に增減するかにかゝつているからである。貨幣の數量の增減が貨幣の購買力從つて一般物價にどの樣な關係を有するか兩者の關係を法則化する。[1] 貨幣數量說は卽ちこれである。然し我々はこゝに於て數量說の意義が如何に多くの學者により種々異つて支持され同一の主張者がないかを知らねばならぬ。それは L. Elster, J. Schumpeter, 我國に於ては高田博士の說を見てもわかる。Elster は「これは一つの名稱であるがそれは事物の個性を示すという使命を完うすることの出來ぬものである」[2] 又 Schumpeter はこの概念の正確な記述を斷念し彼の學說を以て數量說の反駁と見るか、又はその辯明と見るかは一に讀者の判斷に委しているのである。但し Schumpeter は數量說を辯護しようとはしないのであるが數量說の內にある

Wahrheitsgehalt（眞理性）と Praktischer Wert（實際的價値）とを一應認める事が學說史に忠實なる者の使命である[3] と述べ、高田博士は「貨幣數量の意義については從來確定せる說明がある譯ではない」[4] と述べているが此等を見ても數量說の定說を得る事は出來ない。こゝに於て貨幣數量說の個々の學說について說明しなければならぬが紙數の制限は一個の學說のみの究明しか許されない。それ故米國に於て發展し Walker Nicholson Kemmerer を經て Fisher に至つて大成した數量說について述べようと思う。それは貨幣數量說が Fisher の名と共にあまりにも有名であるからである。

2

Fisher の貨幣數量說は Walker の貨幣理論と J. S. Mill の信用理論を受け繼ぎ統計的事實によつて詳細に論證しようと努めたのである。卽ち物價に影響するものは貨幣のみならず信用要素も亦然りとしこれを預金通貨（Deposit Currency）として把握し正確な數字的事實として取扱つたのである。彼の思想の展開は "The Purchasing Power of Money: Its Determination and Relation to Credit, Interest and Crises." である。卽ち貨幣本位の變動により生ずる弊害を指摘して制度改革の具体案を示す基礎工事をなそうとしたのである[5] Fisher の研究の主目的は貨幣(註) が有する購買力は如何なる原因によつて決定されるかである。然るに貨幣の購買力は特定量の貨幣が購買し得る他材の數量によつて示される[6] ものであるから一般的には貨幣の購買力は物價水準とは反對の表現を受けるものである。故に貨幣の購買力は物價水準の研究と同一の事となる[7]のである。我々は今 Fisher の物價水準に關する命題につき考察しなければならぬ。

註 Irving Fisher の著 The purchasing power of money. 第二章第一節の冒頭に吾々は財貨との交換に廣く收受せられるものを貨幣と定義すると述べ "We define money as what is generally acceptable in exchange for goods." この定義の下に貨幣として取扱はれるものに二種ある。一は本源的貨幣（primary money）で貨幣としてではなく財として用いられても貨幣として用いられると均しい價値を有する貨幣である。他は信用的貨幣（Fiduciary money）で、所持者が之を他財と交換し得るとする信認 一詳しく言へば銀行又は政府に於いて本源的貨幣と交換せられるとか、それはとに角として債務を決濟し得るとか、商品を購買し得るとか等一に基づいて、その價値の全部又は一部が成立つているような貨幣であつて、補助貨・銀行券・政府紙幣等これである。そして紙幣は交換に際し一般的に受授されるけれども、小切手は特に受取人の同意を以てのみ受授されるものである。從つて小切手その他の手形は、一般的に受授性なきものであるから貨幣ではない。故に Fisher の貨幣として取扱うものは硬貨及び紙幣であつて。所謂預金通貨は貨幣には非ずして、貨幣の基礎の上に成立するものである。（有井治著貨幣數量說70頁）

3

さて預金通貨（Deposit Currency）卽ち小切手の影響を除外すれば、物價水準は下記の三個の原因にのみ依存すると言い得られる。

1、 流通貨幣の數量
2、 流通貨幣の效率卽ち其の流通の速度（卽ち同一の貨幣が一年間に諸財貨と交換するために授受せられる平均度數）
3、 商品取引の數量（卽ち貨幣を以て購買せられた財貨の總價格）

物價は貨幣の數量を正比例に上下するものであるという、所謂貨幣數量說は經濟學の學說中最も烈しく論爭せられたものゝ一つである。それは主として其の學說の肯定若しくは否定が、商業並に政治上の大なる利害問題に影響を及ぼすからであり、不健全な通貨政策に對する論據として用いられて來たが爲である。斯樣に貨幣數量說は屢々不正確な形式を以て表示せられていたが次の如き意義に解釋すれば此の學說は正確である。卽ち「貨幣流通の速度及商品取引の數量に變動のない限り物價水準は貨幣の數量（姑らく小切手を除外する）と正比例に上下するものである」[6] この主張を

方程式に於て見るならば E (Expend.ture『支出』) を以て貨幣流通の總額卽ち特定の社會に於て特定の一年間に財貨購買の爲に費された貨幣の總額を示し、M (Money『貨幣』) を以て社會に流通せる貨幣の平均額を表示する事にする。Mは特定の一年間に於て、毎週又は毎日の如く相等しい時日間繼續して流通せる貨幣數量の單式算術平均に外ならない。若し一年間の支拂高 (E) を貨幣の平均流通高 (M) を以て除すれば、財貨の交換に對する貨幣の平均回轉率 (Rate of Turnover) (E/M) と稱するものを求め得る。卽ちこれが貨幣の流通速度である此の速度をVを以て表示すればE/M=Vなる方程式を得、從つて E は MV として之を表示する事が出來るであろう。換言すれば、支拂はれたる貨幣と言う意味に於ての貨幣の流通總額は、貨幣の流通總額に流通速度又は回轉度數を乘じた積に等しいものである。それ故に E 又は MV は交換方程式の貨幣側を表示することゝなる。轉じて同方程式の財貨側を見れば、賣買財貨の價格とその數量である。特定社會に於て一年間に購買せられた何等かの特定の財貨を P (Price) となし、其の賣買の總數量を Q (Quantity『數量』) とし又他の財貨を P′ となし其の賣買總數量を Q′ とし更に第三の貨物の價格と其の數量に對しそれぞれ P″ と Q″ を用い、且つ貨幣の種類の多少を問はず、總て他の財貨の價格と數量とを同一の方法を用いて之を示せば、交換方程式を下の如く表示し得る事は明かである。

$$MV = PQ + P'Q' + P''Q'' + \text{etc.}$$

此の方程式の右邊は價格に購買數量を乘じた PQ の各項の和である。數學上斯くの如き同一の形式を有する項の和を略記する爲に、總合の記号として Σ を用うる事が慣例である。此の記号は M. V. P. Q 等の記號の如く或る一種の量を表示するものではなくて、單に加法の運算を示すのみであつて、「次の形式を有する各項の和」と讀む可きものである。それ故に此の記號を用いて交換方程式を下の如く書き得る。

$$MV = \Sigma PQ$$

此處に於て論ずる各量數卽ち E. M. V. P. Q は全社會と一ヶ年全体とに對する統計を示すものであるけれども之等は總て社會を構成している各個人が一年中に購買した財貨及び之に對して支拂つた貨幣を基礎として計算したものである。この代數式交換方程式は勿論前述せる算術方程式と本質的には同一のものである。卽ち此の方程式は單に「一社會に於ける一年間の個々別々の取引を表示する方程式の合計」より成るのである。然るに此の方程式卽ち $MV=\Sigma PQ$ に由つて、前述せし三個の定理をば下の如く表示する事が出來る。

(1) 若し V と Q とに變動がないとしても、M が或る度合を以て增減すれば、方程式の貨幣側は同一の度合を以て增減す可く、從つて財貨側も亦同一の度合を以て變動するであろう。從つて、P は悉く同比例に增減するか、若しくは其の中數個の P が其の比例以上に變動し、他の P は平衡を保つ爲に其の比例以下に增減するに至る。

(2) 若し又 M 及 Q に變化がなくて、V が或る度合に增減すれば方程式の貨幣側は同比例を以て增減す可く、從つて財貨側も亦同比例に變動しなければならぬ。隨つて P は悉く同一の比率を以て變化するか、若ししくは其の中數個の P が其の割合以上に增減すると同時に、他の P は其の度合以下に增減して平均を保つのである。

(3) 更に若し M 並に V に何等の變化がなければ、貨幣側及び財貨側は增減せぬであろう故に若し此の場合に於て Q が或る一定の度合を以て變動すれば、P は悉くその反比例に增減するか、若しくは其の中一部の P は夫れ以上に、他はそれ以下に變動して平均を保つ可きものである。

交換方程式の右邊 (ΣPQ) は更に之を省略して PT を以て表示する事が出來る。P は總ての P の加重算術平均であつて、T は Q の總和である。それ故に P は一般物價の平準を代表し、T は取引高を代表するのである、[9] と述べている。

以上論述せる所を要約するならば Fisher の物價水準が (1) 貨幣の流通高（M）と正比例に、(2) 貨幣流通速度（V）と正比例に、且つ (3) 貨幣を用いたる賣買取引高（T）と反比例に上下するものであり三個關係中第一は特に高調する價値があるものとして取扱い、Fisher に從えば即ち是れが所謂貨幣數量說を構成するものであると述べている。數量說が終極的に、他の總べての財貨が有するに拘らず、貨幣だけがもたない特異性即ち貨幣は人の欲望を充足する力を有する財を購買する力を除き、それ自身では人類の欲望を充足する何等かの力をも持たないという事實に依存している。[10] 然しながら Fisher は物價に影響を及ぼす要素は以上の論述のみを以て十分とはなし得ず、更に進んで信用要具の影響を論ずる。信用とは一般に債權者の債務者に對する請求權である。小切手に關係する銀行預金は預金者の銀行に對する請求權換言すれば、小切手により特定されたる金額の貨幣を要求次第に銀行から受取り得る力を有する請求權である。然るに現在に於ては預金の請求權を表示する小切手は、買手の信用に基ずいて賣手の承諾を得る時は財貨と交換し得るものであつて、一種の購買力を有する預金通貨として、物價に及ぼす影響頗る大なるものがある。かゝる預金通貨は信用の力によつて銀行に存在する現金の數倍の額となつて流通する。從つて前記の方程式は次の如く修正されなければならぬ。但し M′ を預金通貨 V′ をその流通速度とする。

$$MV + M'V' = \Sigma PQ = PT^{(11)}$$

故に物價水準は次の如き方程式で表示する事が出來る。

$$P = \frac{MV + M'V'}{T}^{(12)}$$

即ち Fisher は物價從つて貨幣の購買力に直接關連する原因を五つ求めて居る。

(1) Quantity of Money (M)
(2) Velocity Circulation of Money (V)
(3) Quantity of Deposit Currency (M′)
(4) Velocity of Circulation of Deposit Currency (V′)
(5) Volume of Trade (T)

之等以外の事情は總べてこの五項目の直接原因より物價に影響するものであると言う。(註1.2)若しも前述せし五原因中の一が變動して、他の原因に變化なき時は物價は直ちにその變動せる一原因により變化するその變動が貨幣の數量又はその流通速度或は預金通貨の數量若くはその流通速度なる時は物價水準はこれらの增減と正比例して變動し又取引の數量たけが變化せるものとすれば、物價水準はこの增減と反比例して變動するものである。之を前記の物價方程式について言えば、P は M. V. M′. V′に正比例し、T に反比例して變化する[13] 事は方程式に於て明らかに示され我々が一般數學理論に疑をはさむ余地なきと同樣である。

註1 茲に特に注意すべきはFisherに於ける貨幣の流通速度の觀念である。從來普通に貨幣の流通速度と言えば、同一の貨幣片が一定の期間（例えば一年間に）於て賣買行爲の爲に人手を替える平均度數を稱するものと考へられた。然るに Fisher は前述の如く一應この意味に說明しているが、その眞意は之と異なる即ち彼は主として、實際的な計算の便宜から貨幣の流通速度を特殊の意義に限定している。彼は流通速度の測定方法として、その所謂 "Coin-Trasfer" method と "Person-Turnover" method の二種を擧げ前者は個々の貨幣移轉の跡を追うものであるから、その實行殆んど不可能なるも後者は取引に使用する爲に、一人の手を通貨する貨幣の平均數量をば、その所持する貨幣の平均數量にて除するものとして兩者は之を正しく用うれば同一結果を得べく、たゞ後の方法を採る場合には純流通（Net Circulation）即ち財貨購買の爲の流通（For Purchasing Goods）だけとするか、總流通（Gross Circulation）即ち兩替（Making Change）をも含ましめるかによつて異るとする。然るに彼は後の方法を採用して、之を貨幣の流通速度と

しているのである。即ち流通速度とは、一年間に於ける總べての貨幣的支拂額をかゝる支拂が遂行せられたる流通貨幣の平均額を以つて除したる商である[14]と言う。略言すれば Fisher の流通速度なる觀念は、貨幣が一定期間内に、同一所有者の手許に存する平均帶留期間 (Ruhezeit) を意味するものというべきであろう。

註2 Fisher が以上の五原因を通じて現はれる間接の物價變動原因として擧げるものには、次の如き事項がある。[15]

第一、取引數量に影響する外部的原因。

1 生産者に影響する事情：(イ) 天然資源に於ける地理的差異、(ロ) 分業、(ハ) 生産技術に關する智識、(ニ) 資本の蓄積。

2 消費者に影響する事情：人類欲望の範圍及多樣性。

3 生産者及消費者の双方に關係する事情：(イ) 運輸の難易、(ロ) 貿易の相對的自由、(ハ) 貨幣及び信用の制度の性質、(ニ) 事業信用。

第二、貨幣及び預金通貨の流通速度に影響する外部的原因。

1 個人の習慣：(イ) 消費又は蓄積に關するもの、(ロ) 帳簿信用に關するもの、(ハ) 小切手の使用に關するもの。

2 社會に於ける支拂制度：(イ) 受取及び支拂の頻繁度、(ロ) 受取及び支拂の規則性、(ハ) 受取及び支拂の時と額に關する通信。

3 一般的原因：(イ) 人口の密度、(ロ) 運輸の速度。

猶小切手に關する預金の數量に及ぼす主たる特別の外部的影響には、(イ) 銀行制度及び人々がこの制度を利用する習慣、(ロ) 支拂の習慣等がある。

第三、貨幣の數量に影響を及ぼす外部的原因。

1 貨幣の輸出入を通じて作用する諸原因。

2 貨幣の鑄造及び鑄潰しを通じて作用する諸原因。

3 貨幣用金屬の生産及び消費を通じて作用する諸原因。

4 貨幣制度及び銀行制度の影響[16]。

5

以上 Fisher の貨幣數量說の根本概念について論述し、こゝに至つた。然るに我々は之等の總べてをそのまゝ認める事は出來ない。それは言うまでもなく多くの矛盾を有しているからである。今高垣博士の見解を述べて見よう。先つ最初に前述せし Fisher の四つの命題について批判せねばならぬ。第一について見るならば、預金通貨の增減は貨幣の增減に比例する傾向のあることは一般の事實である。預金通貨の造出は、銀行の保有する現金準備によつて制限を受けるからである。然しそれは常に一定の關係に於てではない。Fisher によればある社會に於て貨幣に對する預金通貨の關係は、その社會の取引關係の發達、人口の集中、人々の富の程度等の條件によつてきまる。現金と小切手との流通關係にはその社會の便宜と習慣に從つてやゝ一定した割合がある。例えば一般的にその割合が亂される事があるとしても自らこれを回復する傾向が働くと見る。然し預金通貨の流通は以上の樣な條件もさる事ながら、さらにそれ以上取引者相互の信用、一般的に言えば社會の信用狀態にあるのである。經濟界が好景氣を呈して信用の利用が進み預金通貨の流通は增加するし然らざる場合は現金取引が增加する。兩者の流通關係は必ずしも一定の比率を以て律し得ない。第二の前提も同樣に矛盾を藏している。貨幣の增減はその流通速度預金通貨の流通速度に影響を及ぼさないという事は事實上許されない仮設である。Fisher によれば貨幣及び預金通貨の流通速度は人口密度、取引慣習、交通の便、不便その他の技術的條件に依るものであり貨幣の數量とは何の關係も無いものであると言う。こゝに言う流通速度は支出された貨幣額の平均手許有高に對する比率即ち回轉率を言うのである。これは各人について見るならば精密を欠くが長期に亘つて見、又多人數について

見るならば、平均的な流通速度が見られるべきものであると言う。今我々が白紙にかえつて考察する時に貨幣數量の增加はその價値を低下させ、人々の消費の傾向を强くし從つて貨幣の支出を大にする事になるのである。之等は同時に流通速度の增加となり取引量の增加を意味せざるを得ない。それ故流通速度は單獨にて一般物價に影響を及ぼす事は認められず結局數量を通じて働くほかはない。流通速度は畢竟貨幣に對する信賴に關する事でそれは數量によつて左右される。第三の前提たる貨幣量の增加は取引の量に影響しないか否かの點について考えて見る。貨幣の增加は自ら生產物を增加する事なく、財貨の流通速度を增加する事もない。取引の量は自然の富源と技術的條件に依り貨幣の數量によらぬと Fisher は述べている。然し貨幣數量說の問題とする事は流通關係に上る財貨であり、生產技術その事に關するものではない。その關する限りに於ては、貨幣の增加はその價値を低下させ、それを財貨とかえる事を促進する、從つて取引量の增加を導く結論に到達せざるを得ない。それ故偏見を以てのぞむにあらざる限り、この前提は事實に反するものである。第四の前提に於て一般物價は常に受け身に立つ所謂從屬變數であつて他の要素を變動せしめる原因とはならないと言う。然し一般物價の變動は即ち貨幣の購買力の變動であつてそれが財貨の需要供給に影響する事は、これまで一般に認められた事實である。即ち一般物價の變動は、貨幣の流通を增減せしめ預金通貨にも影響する原因となる。Fisher はこの場合、個々の價格とを區別し、交換方程式の關することは後者であつて、個々の價格とは離れて考うべき事であると言う。然しながら一般物價の成立は個々の價格を度外視して考える事は出來ない。前者は後者の基礎の上に成り立つものである。貨幣の增加は一般物價に影響するに先だつて、先づ個々の價格に作用しその綜合の結果として一般物價に作用すると同樣に個々の價格の變動の結果として、一般物價に變化を生ぜしめた時は、それは貨幣の價値に影響して、個々の財貨の取引量を左右し、從つて貨幣の量に影響する事になる。一般物價は個々の價格によつて決定されず逆に後者は前者を豫想し、個々の價格について問題となる需要供給の關係は、一般物價の變動を說明する場合に何等の意味をも有しないと見る事は、交換方程式成立の經過にさからい、却つて內在的矛盾を含むものといわねばならない。

即ち Fisher の四つの前提條件が以上の如く多くの矛盾を藏しつゝ貨幣の數量から一般物價への因果關係を一義的に說明せんが爲に立論せられた事實に合しない仮定以外の何ものでもない事を我々は知つた、こゝに彼の推論に含まれる無理があり、又斯樣な想定の上に立たなければならぬところに、この學說の現實から隔離する弱点が見出される。又交換方程式の形で示されたある經濟社會、ある經濟期間に於ける $MV + M'V'$ が PT と數學的には等價式の關係に立たしめられる事は否定し得ない。Fisher はこの式を單なる取引關係の計算的表示に止めず貨幣數量から一般物價への、因果關係の移行を說明する根據とした。交換方程式はもと因果關係を示すものではなくして左右両項の等しい事を表すにすぎない。此の場合に於ける貨幣及預金通貨の數量は、現實に交換に使用された數量でありその社會に存在する數量でもなく又交換に用いられる數量でもない。それ等の流通速度にしても存在量と支拂總額との關係を期間の終りに至つて計算して割出すものに外ならない。然し事實上一般物價に影響を及ぼすべき貨幣の數量は既に流通に用いられた數量ではなく、流通に用いられ得る數量でなくてはならぬ。これはある條件の下に交換關係に入り來り得る可能性を持つ數量である。貨幣の價値若くは購買力がその數量によつて決定されるという場合に大切な事は現實に交換に用いられた數量ではなくして、これから交換に入り込み得る數量である。それに照して考えられた價値判斷に從つて、その中の或る部分が交換を實現する關係に入つてくるのである。貨幣數量說が現金取引の考えから、現金殘高の考えに移つていつたのは、尤もの事と言わねばなるまい。

以上 Fisher の數量說をかえりみるならば經濟社會の取引關係の計算的表示にすぎず。我々はこれにより貨幣數量說から一般物價への因果關係を說明する事は出來ない。敢て欲するならば別の理

論を得なければならぬ。我々は今以てこゝに至る迄彼の數量說の批判に終始した。だが Fisher の貨幣數量說は多くの批判は免れぬとしても貨幣數量說發展の途上に大なる足跡を刻した事實を見ても高く評價しなければならぬ。それは幾多の前提を立てゝ靜態を考えたもので、現實をそのまゝに說明するものでないことは Fisher 自身認めていた。一つの方程式が成立する狀態から、他の狀態に移行せしめる原因として Fisher は利子歩合のもつ重要さを指摘したのである。

參考文獻

(1) 高垣寅次郎：貨幣論入門. 57頁.　(2) Elster, K.: Seele des Geldes. 2 Aufl Jena, 1923. S. 164—5.
(3) Schumpeter, J.: Das Sozialprodukt uud die Rechenpfennige. Archiv. F. Sozialw. u. Sozialpol. 44 Bd. 3 Ht. 1918. S. 667.　(4) 高田保馬: 經濟學新講、第三卷 貨幣の理論（昭和5年）295頁.
(5) 高垣寅次郎：貨幣論入門. 67頁.　(6) Fisher: Purchasing powar of money, 1911, Naw aud Rev. ed., NewYork, 1926, p.13.　(7) Fisher: Purchasing power of money p. 30.　(8) Fisher : Purchasing power of money. 1911. 金原賢之助・高城仙次郎共譯. 17—18頁.　(9) 同上 31—34頁.
(10) Fisher : Purchasing power of money. 1926 貨幣の購買力 pp. 31—32.　(11) 同上 48頁.　(12) 同上 277頁.
(13) 有井治：貨幣數量說 73頁.　(14) Fisher : Purchasing power of money. 1926, p. 17.　(15) 同上 74—111頁.
(16) 有井治：貨幣數量說. 73—75頁.

社會的とヒューマニズム

—人間形成に於ける個人化と社會—

砂澤喜代次

Kiyoji Sunasawa : On Social Humanism.　Individualization and Socialization in Education.

序

終戰後我が國に於て何處からともなくヒューマニズム論が再興して來た。戰前、戰時に問題とされなかつた「人間」が、今更のように意識されて來た証據でもある。人間にとつて「人間的なこと」が問われて來るところに、ヒューマニズムが叫ばれるのは、近世初頭のことであり、別に不思議なことではない。ところが戰後の我が國のヒューマニズムは、果して日本社會の現實に於て人間を問うものであろうか。

教育再編の道も民主主義の線に沿うているが、深刻な現實と眞正面から取組むことの元來嫌いな日本人は何時しか小手先のマンネリズムに墮しつゝありはしないであろうか、新らしい日本社會の再建は、何よりも先に現實の事態を鋭く分析し、それを基盤としてのことでなければならぬし、教育再編の道もかかる現實社會の眞只中に人間を正しく据えることによつて開かれねばならぬ。ここに社會と人間に對する正しい態度決定が特に要請される所以がある。私はこの社會と人間との關係をヒューマニズムの立場から考へて見たいと思う。それを社會的ヒューマニズムの立場と言う。

1

ブルダッハは「新らしき人間的なもの若くは理想的人間像を追求する努力の中にヒューマニズムは求められる」[1] と言う。ヒューマニズムの源流は勿論ヘレニズム文化、即ちギリシヤ的人間像や世界觀に見出されるが、それはローマのキケロ時代のフマニタス (humanitas) の思想に媒介されて、近世ルネッサンスには明確な思想形態を取つて現われて來たことは、人のよく知るところである。